

子どもと教師の関係性を生かした小学校カリキュラムの編成 ～ 東京都稲城市立稲城第六小学校を例に～

中妻雅彦

教職実践講座

The Relationship between Children and Teachers in organizing The Curriculum of Elementary Schools ～ An example of Inagi City the Sixth Elementary School, Tokyo ～

Masahiko NAKATSUMA

Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 問題の所在

2002年度からの学習指導要領の改訂は、「生きる力」や「自ら学び、自ら考える力」を育成することを学校教育の基調に転換することを目指し、「総合的な学習の時間」の創設によって、学校独自のカリキュラム編成の可能性を広げた。カリキュラムの学校における編成を視野に入れて、学校独自の教育活動によって構成された「総合的な学習の時間」は、地域を生かした独自性や特色あるカリキュラムとして、学校を地域に開く取り組みとなって広がり、各地の学校の創意工夫のある教育活動となっている。さらに「総合的な学習の時間」によって広がった学習は、教科学習の内容まで視野に入れた新たな学習活動やカリキュラムの編成にもなっている¹⁾。

これらの教育実践の多くは、学校が、教科学習を発展的に拡大し、保護者や市民の協力をえた新たな学習内容とカリキュラムを作成する試みである。佐藤学は、これらの教育実践の意義を、教育の公共圏を人々のネットワークで再構築し、多様な個性を尊重しあう教育による民主主義の実現と、学校を「学びの共同体」として再定義することであり、これらの学校改革への無数の挑戦が、未来の学校への希望をつなぐことができると主張している²⁾。

その実践校として、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校や静岡県富士市立岳陽中学校などが紹介され、マスコミにも取り上げられている。それぞれの学校が「学びの共同体」を構築する試みを続け、公立学校の改革に参考となる成果を出していることは評価のできることであるが³⁾、一方では、佐藤が提起するような「無数の挑戦」が公立学校の多くでは実現できていないこ

とも現実である。

それは、PISA 調査や全国学力調査などの結果から主張されている「学力低下」論を背景とした「学力保障」や授業時数確保、また、学習指導要領が「最低限目標」としての位置づけられたことなどによって、各学校における自主的なカリキュラム編成が窮屈な状態になっていることに一因がある。さらに、2008年3月に告示された学習指導要領は、「活用型」学習や体験活動重視など、学習方法まで規定しており、学校における自主的なカリキュラム編成はより困難となりつつある。

また、「校長主導」をうたった管理的な学校運営によって、教職員の話し合いによって学校運営の合意形成をしてきた職員会議の形骸化や学校運営上での位置づけの変化は、教員の自主性を不足させ、世界的にも特筆される校内研究会が、形式化したり、画一化したりすることによって、教員の同僚性や自律性が損なわれている。これらの学校運営の変化と教員管理の強化も、教育実践を進める困難になっている。

佐藤が提起している「学びの共同体」の根幹をなす学校における教師の協力の困難さが増している。

こうした現状の中では、具体的な教育実践によって教師の協力を回復することが必要であることを筆者は主張し、東京都公立小学校在職中に、いくつかの実践を進めてきた⁴⁾。この教師の協力を回復するための具体的な教育実践を、地域と子どもの状況を踏まえた学校全体の実践とすることによって、学校教育の具体的な改善を図る必要がある。

学校を、単に知識や技能の教授や伝達ではなく、青少年期に長く集団的な生活をすごす場としてとらえ、家族集団以外では、子どもの成長と発達に責任

を問える唯一の機関になっているといわれていることに注目し、学校の機能を問い直すことである⁵⁾。それは、学校を子どもの生活の場として位置づけることである。この視点から学校のカリキュラムを見直すことは、学校におけるカリキュラムを、毎日の学校生活を形成する子どもと教師、子ども同士の関係性を土台として編成することを意味している。学校は、子どもと教師、子ども同士の日常的な人間関係で成り立っていることから見直すことである。これらの視点を通して、教師の協同の困難さは、子どもと教師の関係性の再構築を目的とした教育実践によって克服される。そして、教師の協同の回復は、教育実践の改革を実現し、学校教育全体のカリキュラム編成の改善を志向することになる。

こうした公立学校における学校独自のカリキュラム編成による教育実践は、学習指導要領による学習内容の制約や行政指導によって、困難が増しているが、各公立学校は、年度毎の教育課程届を、前年度末に当該教育委員会に提出し、承認を受けているのであり、その教育課程届に記載された教育目標や教育内容によって、学校におけるカリキュラムを編成しており、これらの届け出た教育課程・カリキュラムが、教師集団の合意で作成することができていれば、公立学校においても、学校独自のカリキュラム編成は可能である。

以下、東京都稲城市立稲城第六小学校（以下、稲城六小）の教育実践を取り上げ、稲城六小から稲城市教育委員会（以下、稲城市教委）へ届け出られた「平成17年度教育課程（届）」や稲城市教委指導室担当者の稲城市議会における発言などを検討することによって、教師集団の合意によって編成された稲城六小のカリキュラムが、教育課程編成に指導権限を持つ教育委員会によっても認められ、学校独自のカリキュラム編成として価値ある内容であることを実証する。そして、学習指導要領の拘束性の中でも、教師の合意に基づくカリキュラム編成によって、学校改革の「無数の挑戦」が多くの公立学校でも可能であり、稲城六小の教育実践に関わった教師の意見や考えを考察することによって、子どもと教師、子ども同士、教師同士の関係性を土台とすることが、教師集団の合意をつくり、学校独自のカリキュラム編成を実現し、毎日の教育実践の改善を図り、学校全体の教育実践を通して、教育改革に参加できることを実証する。

2. 稲城市立稲城第六小学校の教育実践 ～「教育課程届」と教育行政

稲城第六小学校⁶⁾は、1994年から14年間にわたって、全校全学級の学習活動として、「総合的な学習の時間」や「学校裁量の時間」を活用して、毎朝15分間の「スピーチ活動」を継続して実践している。全校の教師集団の合意による「スピーチ活動」を土台として、校内

研究活動を進め、教科課程、教育課程の改善に取り組み、地域や保護者との協力が広がっていることが、複数の教育学関係者によって認められている⁷⁾。「スピーチ活動」は、教科学習とはちがい子どもと教師、子ども同士の人間関係を豊かにすることを目的としており、稲城六小の教育実践とカリキュラム編成の軸となっている学習活動である⁸⁾。

稲城六小は、14年間継続されている「スピーチ活動」の教育実践の過程で、稲城市教育委員会研究奨励校や研究課題校に毎年のように指定されているが、それは、研究の市教委による指定や強制ではなく、教師集団の毎年の論議によって、教育実践を積極的に公開することによって、地域の信頼を広げ、教育内容をより豊かにすることを目指している。そのために、「スピーチ活動研究発表会」を、毎年のように開催し、地域に向けて教育実践の内容と成果を公開している。2002年度の稲城市教委研究奨励校研究発表会の研究テーマは、「子どもの笑顔輝く『教育課程』づくり～子どもの生活と地域に根ざしたスピーチ・総合・教科学習～」と設定し、「スピーチ活動」を、総合学習（稲城六小は、時間割上の表記を「総合」としている。以下、公的な文書等からの引用は、「総合的な学習の時間」、稲城六小の教育実践としては「総合学習」とする）としてカリキュラム編成の中心軸となる教育活動として位置づけている。「スピーチ活動」は、人間関係づくりを目的とした学校づくりの中心的な教育実践としてだけでなく、総合学習・教科学習を稲城六小のカリキュラムとして再構成する学習活動の土台ともなっている。

公立学校のカリキュラムは、各学校から教育委員会に届出された文書を、教育委員会が承認することによって、正式に認められる。各学校から教育委員会に届出された文書によって、教育内容が決定されているのであり、その文書の内容を検討することによって、一つ一つ学校の教育内容が明らかになってくる。

稲城六小から、稲城市教育委員会に提出された「平成17年度教育課程について（届）」⁹⁾（以下、「届出教育課程」）は、学校教育目標を次のように規定している。

「第1表 1教育目標（1）学校の教育目標 日本国憲法及び教育基本法にのっとり、人間尊重の精神を基盤とし、子どもたちが心身ともに健康で、知性と感性に富み、生涯を通じて学び、人間性豊かに成長することを願い、文化と伝統を大切に、世界平和と人類の福祉に貢献することができる人間の育成を目指すため、次のように教育目標を設定する。

・心豊かな子 ・考える子 ・元気な子」

この文言だけを読むと全くどの学校にも共通するように感じられるが、教育委員会による「届出教育課程」の指導の基準となる東京都教育委員会の教育目標、稲城市教育委員会の教育目標の文言から「日本国憲法」

「教育基本法」がなくなってから数年たち、指導が毎年のように繰り返されているにもかかわらず、教師集団の合意によって、学校教育の基本に日本国憲法と教育基本法を置き、教育実践を進めようとしていることは特筆すべきことである。

また、東京都教委と稲城市教委の教育目標は、「互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間

【自立した】社会の一員として、【地域や】社会に貢献しようとする人間 自ら学び考え行動する、【しなやかな】個性と創造力豊かな人間」(【 】は、稲城市教委の教育目標にだけ書かれている文言)を掲げているが、文言にはほとんど違いが見られず、都教委、市教委の教育目標によって行われる教育委員会の指導が、「規範意識」「社会貢献」などをキーワードとした画一的な指導になりがちであることは否定することはできないであろう¹⁰⁾。

こうした条件の中で、教師集団の合意に基づく学校独自のカリキュラム編成である「届出教育課程」を実現していくにはいくつもの困難がある。稲城六小の「届出教育課程」においても、規範意識や社会貢献について、生命尊重と人権教育に関連させて述べられている文言もある。これらがなければ、教育委員会の「指導」が強く行われるからである。しかし、稲城六小の具体性を持った教育活動は、日本国憲法・教育基本法に依拠しながら、学校教育目標に基づく教育活動として次のように規定している。

「第1表 1教育目標 (2) 学校教育目標を達成するための基本方針 総合的な学習の時間の充実」では、「児童のスピーチ活動を継続して行い、表現力を育成し、人間関係を豊かにするとともに、地域の自然や文化を活用した学習を一層充実させる」と述べられており、「スピーチ活動」が、総合学習の学習内容の一つであり、学習の目的は、人間関係を豊かにすることを明確にしている。さらに、「スピーチ活動」を土台とした総合学習の学習内容を「地域の自然や文化を活用した学習」として位置づけている。

また、「届出教育課程」の「第2表 2指導の重点 (1) 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間 総合的な学習の時間」でも、「人間関係を豊かにするための異学年交流やスピーチ活動を充実する」としており、ここでも、人間関係づくりを土台とした教育活動を進めることを明確にし、「1教育目標」の内容をより一層具体化することを提起している。それは、「地域の自然・文化・人材や多摩川の学習を生かして、ふれ合い、かかわり合いを深める」ことであり、これらの総合学習の学習活動は、「異学年に教えあい、伝え合う活動を行い、自然や文化を伝承し、本校の伝統的な活動を継承し、高めていく」活動であるとも表記している。

稲城六小の教育実践の特徴は、人間関係づくりを教

育実践の柱として位置づけ、人間関係づくりを進める教育実践として「スピーチ活動」に取り組み、「スピーチ活動」を通して形成された人間関係を土台とした総合学習の実践が取り込まれていることを指摘することができる。ここで、人間関係づくりを強調しているのは、教育基本法に掲げられた教育の目的を、稲城六小での具体化として独自のカリキュラムに位置づけた内容であり、学校教育目標を、具体的な教育実践に生かしている。

こうした稲城六小のカリキュラム編成の特徴は、「届出教育課程」の別の部分からも指摘することができる。「第3表 3学年別授業日数及び授業時数の配当 (2) 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の年間授業時数配当表」の「備考」には、「上記の他に、全学年が、8時35分から50分を、総合的な学習の時間に充てる。1週に15分を3回で1単位時間とする。1年生は34時間、2年生以上は35時間実施する(1・2年生は教科時数として累積しない)」とし、いわゆる「モジュール」制による授業時間の弾力的な運用を積極的に取り入れて、時間割編成のなかに、「スピーチ活動」の時間を確保している。これは、同じく「届出教育課程」として稲城市教委に提出されている「平成17年度週時程表」にも、「総合的な学習の時間」として、火曜、水曜、金曜日の8時35分から50分に、「スピーチ活動」の時間が明示されている。

「学力向上」が声高に叫ばれ状況のなかで、本来、学校独自の創意工夫を可能とし、授業時間の弾力化を目指す「モジュール」制が一律に禁止された地域や、「総合的な学習の時間」で「英語活動」が課せられている地域などがあるが、稲城六小の「届出教育課程」に見られる授業時間の弾力的な運用や「総合的な学習の時間」に年間35時間の「スピーチ活動」を実践しているという特徴は、学校が子どもの実態に応じた自主的なカリキュラム編成を行っていることを示している。これらの「届出教育課程」に明示された内容は、稲城六小の「教育計画」として教師がいつも手元に持ち、教育実践を考え、実施するための指針となっている。

この「届出教育課程」は、稲城市教育委員会が承認することによって、公的に認めている教育活動であること当然のことであるが、多くの自治体では、教育委員会によって指定された教育活動以外を否定する傾向もある。しかし、稲城市教委はそのような姿勢をとらず、稲城六小の教育活動を認め、擁護する立場を明らかにしている。以下、稲城市教委の公的な見解である稲城市議会における答弁を基にして、稲城市教委の見解を考察する。

教育委員会が、個々の学校の教育活動の内容について公的に評価することは教育委員会の研究発表会における「指導講評」以外ではあまり機会がない。稲城市教育部参事(教育委員会指導室長)は、市議会の答弁

で、「スピーチ活動」を学力の向上を目指した取り組み市内の学校の実践例の一つとして取り上げ、次のように答弁している¹¹⁾。

「各学校における学力向上を目指した取り組みにつきましては、これまでも各学校で創意工夫を凝らし進めてきております。一例を挙げますと、放課後における全校児童対象の個別指導、2学級を3グループに分けての少人数指導、表現力を高めるスピーチ活動、算数や音楽を初めとする教科指導へのコンピューターの活用、保護者の協力やゲスト・ティーチャーを招いての学習指導、中学校教員が小学校で向いての出前授業、玉川大学学生によるボランティアなどがございます。」(下線は、筆者による)

この市議会における答弁は、「モジュール」制の授業時間を活用した「スピーチ活動」を、「学力向上」につながる市教委の施策の一つとして認める内容であり、稲城六小の学校独自のカリキュラム編成を認め、励ましている。

こうして進められている「スピーチ活動」の実践は、人間関係づくりを目的としていることによって、子ども同士の間関係をつくるだけでなく、子どもと教師の関係性の再構築も視野に入れることができる¹²⁾。子どもと教師の関係性の再構築は、教育実践における教師の役割を見直し、子どもにとってより価値のある学習を構成することを次の課題として、教師に提示する。稲城六小では、この実践を全校で実施することによって、教科学習や総合学習の学習内容の改善への取り組みが進み、子どもの生活や地域の特徴を生かし、子どもの興味と関心を広げる学習活動が実践されることになる¹³⁾。

こうした学校独自のカリキュラム編成に基づく教育が実践されるためには、「届出教育課程」を編成する教師集団の合意が重要であることは「届出教育課程」が、職員会議で討議され、学校長名で提出されることから明らかであり、それを認め励ます教育委員会のあり方も大切な要素となる。稲城六小の教育実践を考察すれば、各学校における教育課程論議と、その内容を、学校教育目標に記し、それを実行するための具体的な教育実践として、「届出教育課程」に編成する意義は明らかである。それによって、学校独自のカリキュラム編成を通して、各学校が、それぞれに価値のある教育改革の提案と実践を可能とできる。

3. 子どもと教師の関係づくりを土台としたカリキュラム編成～「スピーチ活動」を土台に～

学校におけるカリキュラム編成は、「学校づくりの羅針盤¹⁴⁾」と言われている。羅針盤であるためには、各学校においてカリキュラム編成を担う教師集団が、子どもの発達や生活の現状を把握し、教育活動として子どもに対してどのような働きかけが必要であるのかを明

らかにしなければならない。前章でも明らかなように、公立学校における「羅針盤」は、具体的には、「届出教育課程」として明らかにされている。その内容によって「学校づくり」の航海の方角が決定されている。

「学校づくりの羅針盤」をそれぞれの学校が、地域や子どもの特性に応じた内容で決定するために、学校教育を、教師集団の実践の協同によって転換していくことが必要である。その方向性については、さまざまな論議と実践がなされているが、佐藤学は、「学力低下」問題から発せられる危機を乗り越える学校カリキュラムの転換がいまだ成しえておらず、ポスト産業社会への転換に対応する21世紀にふさわしいカリキュラム構造と学びの様式が研究される必要があり、その内容は、「登山型」カリキュラム、「プロジェクト型」単元学習、「協同学習」への学びの移行へと方向性が定まりつつあるとするが、いまだ定式化するにはいたっていない問題でもあると指摘する¹⁵⁾。同様に、梅原利夫は、2002年の学習指導要領実施による学校現場の激変を克服し、21世紀はじめの教育実践を創り出すために、教師と教師集団の力量形成によって、手ごたえのある教育実践を創造し、学校づくり全体を構想する見通しを持って、教育改革の事業に参加することを求めている¹⁶⁾。2008年の学習指導要領改訂にあたっては、学習指導要領体制を批判し、子どもに学びがいのある授業、教師に教えがいのある指導、国民の主権者としての期待にこたえる学力と人間らしさのある教育を提案している¹⁷⁾。

学校現場において、佐藤や梅原が指摘する課題にこたえる教育実践を創り出すことはなかなか困難なことであるが、一方で、日々、教育実践は行われており、校内研究と教師の協同の積み上げによって、新たな可能性を見出す学びの移行を志向できる「手ごたえのある教育実践」を創り出し、新たなカリキュラムを編成することは、毎日、毎日の教育実践の中から探り出すことによって可能となる。

カリキュラム編成にあたって、柴田義松は、その編成に直接、手を下すのは、学校の教師であるが、その編成を規定する要因は、子ども、教科書、学校、各種法令と教師の4つに影響されるとしている。その第一にあげられているのが、教育の対象である子どもの理解度、要求、関心である¹⁸⁾。

従来から、子どもの実態の把握は、学校内の論議では、「年度末反省」「教育課程職員会議」などの名称で、学年末に集中的に論議されてきた。また、校内研究会等でも、定期的に取り組みされたりしてきたが、多くの学校においては、いわゆる「生活指導」を中心とした問題として進められてきた。しかし、子どもの家族のほかには、子どもの成長と発達に責任を持つ場が、学校教育しか存在しない現状では、いわゆる「生活指導」による子どもの実態把握だけではなく、学校生活の多

くの時間を占めている学習活動を通して子どもの生活実態や学習要求を把握し、子どもの生活を学習に結びつけることを目指した子どもを理解する必要にせまられている。

こうした学習活動を通した子どもの実態把握は、従来の学校教育の中では、個々の教師の「朝の会」「生活のたより」「3分間スピーチ」「生活作文」などの教育実践として取り組まれ、子どもの生活や学習要求をつかみ、教科学習に生かすことが行われてきた。そして、こうした日常的な子どもと教師の関係づくりが、教科教育を支える土台となっていた。これらの教育活動は、学習指導要領に書かれていなかったり、教育委員会から示される「届出教育課程」のひな型になかったりすることによって、教科教育としても、教科外教育としても、カリキュラムに規定することができないままであった。しかし、日常的な学習活動として、学校教育の中の「隠れた」カリキュラムとなっており、実践している教師にとっては、自らの教育実践の根幹であるかのように実践されていたにもかかわらず、長い間、その有効性が論議されることはほとんどなかった。

しかし、多くの教師は、授業づくり、学級づくりの第一歩として、こうした活動に何らかの意義を見出し、継続的に実践を続けてきた。稲城六小でも、「スピーチ活動」を全校で、毎朝の学習活動として実践を進める以前から、子どもの話し言葉を中心とした「朝の活動」や作文指導は、全ての学級で取り組まれていた。そして、校内研究活動を、教科の枠ではなく、教師の得意とする授業の公開で進めることによって、1時間の授業を進めるための土台となる「朝の活動」の意義が確認されることとなった¹⁹⁾。

教科学習を支える学習活動としても実践されている「スピーチ活動」の目的を、人間関係づくりに焦点を当てることによって、学習活動を通して、学校独自のカリキュラム編成の第一の要因となる子ども理解が、教師の視野に入ることになった。こうした子ども理解を進める活動となったことについて、稲城六小が、スピーチ活動の実践を開始した当初から在職した40代の女性教師は、

「主に、中学年の担任として係わるが多かったが、1・2年生の時に『スピーチ活動』をしていなかった子どもたちと、していた子どもたちでは（もちろんそれだけが原因とはいえないが）友だち同士、学級内の壁のようなものの感じ方が違うと思った。ちょうど学級規模が小さくなりはじめ、1学年2学級になった時期とも重なるので何ともいえないが、3年生を受け持った時に子ども同士の中に仲間をさぐりあう（あまりいい表現ではないが）雰囲気があったのが少なくなったと思う。」

と、子ども同士の人間関係が深くなっていたことを感じている。教師の実感として、子どもが変化している

ことを感じ取れば、その変化は、学習活動を改善する要因となることは明らかであり、子ども理解を土台とした学校独自のカリキュラム編成を志向することになった。

また、「スピーチ活動」をはじめとした稲城六小の学校づくりに長い間、教務主任などとして、中心的に関わってきた男性教師は、「クラスの子ども一人ひとりが『主人公』となれるよい活動だと思う。『学級づくり』がスムーズにいいい『スピーチ活動』も期待したものにはならず、悩む、苦労する新人さんもあるが『スピーチ活動』を研究する中で『学級づくり』に、もっと踏み込んで論議できたらよいのと思う。そういう意味で、自分の学級の状況をチェックできるという側面からも有意義な活動であると思う。」

と述べている。「学級の状況のチェックができる」とは、子どもと教師の関係を振り返ることであり、現在のカリキュラムの適否を考え、現状を分析し、次のカリキュラム編成と改善の方向を見出す要因となることである。子ども理解を共通認識としながら、学校独自のカリキュラム編成を実現できるようになったことが、これらの教師の意見の中からも明らかにすることができる。

また、稲城六小が初任校となった20代の女性教師は、「六小に来る前の実習校（公立）で『必ずいやなおばさんが一人はいるからね』と言われてきました。でも六小に来て、そういう人がいなくて本当によかったと安心しました。生活指導全体会をはじめとして、担任をせめるのではなくみんなで支えあおうっていう空気ができていることが大きいのではないかと考えています。」

と書いている²⁰⁾。「スピーチ活動」が、子ども同士の人間関係を構築し、子どもと教師の関係性を再認識させるだけでなく、子どものことを話し合い、共に考え合う教師同士の関係性をも再構築することができることが確認できる。

週3日、15分3回の実践の「スピーチ活動」の実践は、学校を直ちに变容させるような即効性のある教育実践の取り組みではないが、子どもが自分の生活を語り、子ども同士の関係を構築し、子どもと教師の関係性を築くことができる学習活動である。稲城六小は、この学習活動によって、教師が、子どもの生活を把握し、子どもの現状と学習要求を反映した教科学習、総合学習、特別活動の改善を行い、学校カリキュラムの改善を集団的に討議し、実践することを可能としているのである。カリキュラム編成の土台に、子ども理解、子どもと教師、子ども同士、教師同士の関係性を形成する教育実践、学習活動をおくことによって、子どもの実態に即した学校独自のカリキュラム改善が実

現できることを、稲城六小の学校づくりは明らかにしている。

4. 子どもの生活と地域を生かしたカリキュラム編成

「スピーチ活動」の実践によって、子どもの現状を把握し、子ども理解を進めた教師集団は、カリキュラムを改善するポイントが、子どもの生活や地域と、学校教育をどのように結合させるのかにあることを学んできた。その結果、公立学校としてのさまざまな制約の中でも自主的なカリキュラム編成が可能である総合学習を中心に、地域の特徴となっている自然や歴史を学習活動に生かした学習が取り組まれていることは、「届出教育課程」の文言からも明らかである。

また、稲城六小から発信された「スピーチ活動」や「多摩川」「大丸用水」などの総合学習の実践は、稲城市内の他の学校にも広がっている²¹⁾。

最近の「学力低下」問題に起因する総合学習への否定的な見方は、2008年学習指導要領でも、「総合的な学習の時間」の時数削減や学習内容の変化となっているが、稲城六小の教育実践と総合学習は、稲城市教委によって、公に認められた教育活動であり、市議会における稲城市教育部参事（教育委員会指導室長）の次の答弁でも、市内の他の学校の実践としても広がり、子どもの成長を確かなものとする学習として確認することができる²²⁾。

「今、多摩川の自然というお尋ねでございますが、稲城市は幸いにして多摩川といういろいろな可能性を秘めた自然に恵まれていると考えております。第六小学校の例を今お話ししましたけれども、多くの学校が多摩川の自然を生かした教育活動を行っております。その中の一つとして、第六小学校では取り組んできているわけです。4年生が総合的な学習の時間の中で、多摩川を題材に、約53時間かけて取り組んでおります。（中略）それから、大丸用水を調べようということで、大丸用水についての勉強をしております。最後に、第4テーマでございますが、多摩川のすごさを伝えようということで、まとめの時間を4時間ほどっております。このように、自然観察、それから遊びを通しての体験で、川の持つ学習の価値を体で感じることができている。それから、バックテスト、川の中でCOD

化学的酸素要求量の測定を行ったり、先ほど言いました下水処理場とか清掃工場の見学を通して環境を科学的に見る視点を学んでいくということです。これらの学習を通して1人1人の課題が生まれてきていると伺っております。例えば、川のきれい、汚いは何によって決まるのかとか、日本の川は急流だと書いてあったけれども、本当なのかなどという学習課題がそれぞれの子供たちに生まれてきて、それらをさらに追求していくような価値のある課題に発展してきている

といった話を伺っております。」

この答弁からもわかるように、稲城六小の総合学習は、地域の自然環境を生かした学習活動として、稲城市内の他の学校に実践が広がっていることも述べられている。市議会で質問に立つ議員は、保守・革新の違いをこえて、地域を生かした学習の内容を問うており、総合学習で取り上げる多摩川や大丸用水（江戸時代に開発された農業用水）などの地域教材の意義を認めた発言・質問内容となっている。学習内容そのものを、地域を生かして構成するによって、地域に開かれた学校づくりにもつながっている。

総合学習の改善が進むことは、必然的に、総合学習と関連する教科学習においても、子どもにわかる授業、楽しい授業の追究が行われ、地域教材を生かしたり、体験活動を取り入れたりする授業実践や教科課程の編成が進むことになり、学習内容や学習方法は、教師集団の論議を踏まえて改善され、学校独自のカリキュラムとして教育実践が行われている。50代のベテランの女性教師は、

「スピーチ活動の研究、研究発表会の国語の研究授業、国語の教育計画作成と六小の研究の一つの役割としてかかりました。学校全体の中では微々たる力だったと思いますが、自分としては、六小の研究のために持っている力は出せたと思います。」

とアンケートに答えている。小学校教師は、専門教科を持たないといわれるが、多くの教師は自分の得意とする教科を持っており、教師集団の中で、教科教育の研究に自分の能力を発揮できた実感できることは、教師の仕事の達成感となる。それを感じることでできる教師自身の研究と実践ができていることは稲城六小の教育実践を担う教師集団の質の高さを物語っている。

こうして生み出された教科課程は、稲城六小のほとんどの教科に及び、算数では、筆算を早くから取り入れたり、数多くの見学学習によって社会科学習を進めたりする実践が取り組まれている²³⁾。これらの教科課程の編成は、日常の授業における教師の経験的な実践の積み上げや子どもとの学習の取り組みを通して学んだ内容であり、他の公刊されている実践と比較して、著しい特徴があるわけではないが、子どもと教師の教育実践の経験知として生み出されたものであり、学習を進めるためには何にも変えがたい良さと価値を持っている内容である。その学校に固有な子ども理解に基づいた子どもの生活を生かした教科課程の編成となっている。

こうした地域と子どもの生活を生かし、教師集団による合意形成によるカリキュラムの編成を、校長として、9年間、稲城六小に在職した女性は、
「子どもたちも喜び、保護者・地域の方々にも認められている財産を持っている六小はずばらしいと思いま

す。地域、風土を見すえて、子供に適した活動を組み立てることがいかに大事かということだと思います。職員の口癖だった『今、ここにいる子どもから学び、子どもからスタートしよう!!』9年間勤務して、今も、このことばを大事にしています。』

と記す内容となり、子どもと教師の関係性を土台として編成されたカリキュラムが、必然的に地域と生活に根ざす教育実践となり、学校を取り巻くさまざまな人々からも評価される学習内容となっていることが述べられている。

稲城六小のカリキュラムが、地域と子どもの生活に根ざした内容であり、さまざまな困難をかかえている子どもや、子どもの問題で悩んでいる保護者・市民に、学校が接近しようとする試みであることは、毎朝の「スピーチ活動」を参観する保護者の数の多さや、読み聞かせ・図書ボランティア、ダディーズ(父親の会)などの学校参加の広がりによっても確認することができる。

稲城六小の校内研究会や公開研究会に講師として参加した柴田義松は、研究会で公開された図工の木工の授業に触れながら、技術・ものづくりをカリキュラムに位置づけたことの意義を評価し、「今日の授業で、子どもが四角い木を丸い玉にすることを一生涯懸命やっていた。あれはすごい やっぱり子どもは、ああいうことを、ものづくりということをデュエイが言うように、生まれつきに楽しむんだなと思いました。」と述べている。同じく講師であった中野光は、総合学習について、教科学習も、学校行事も、必然的に総合学習に発展するものであり、稲城六小の多摩川、大丸用水、八ヶ岳林間学校の取り組みを評価している²⁴⁾。

稲城六小の教師集団の実践的な学習経験によって編成されたカリキュラムは、毎年改訂されなければならない課題をかかえていることは当然であるが、地域と子どもの生活に密着した教師の経験知であるからこそ、教師集団を構成する教師一人一人の個性が表れ、地域の公立学校のカリキュラムとして価値と意義を持っている。

以上のようにさまざまな立場や考え方の方々の稲城六小のカリキュラムへの評価は、教師集団が、子どもとの関係性の構築を第一の課題としたことによって、教育実践の価値と意義を、地域と子どもの生活から学び取り、子どもと教師の関係のなかに発見することができたことによって実現したことを明らかにしている。そのスタートとなり、子どもと教師の関係性を問うことを可能とした「スピーチ活動」の教育的な意義は大きいといえる。

5. 公立小学校における教育実践研究の課題

各公立学校におけるカリキュラム編成は、教育委員会への届出が必要であり、毎年、論議されている課題

であるが、近年、教育内容や教育方法が制約され、学校での論議が弱くなっている傾向がある。稲城六小に在職した教師へのアンケートでも、

「教師集団の納得のないまま、教育委員会が教育活動(教育課程や学習方法、授業形態など)について、いろいろ注文をつけてくる。一人ひとりの教師が考えなくなり、上からの要求に応えることに精一杯になり、子どもの姿、学級の様子をみなくなっている。特に若い教師が教師同士の話し合いで、子どもの見方や親へのアドバイスの仕方、家庭の様子への思いをはせることを学んでいないのが、今後に向けて心配。教師一人一人をばらばらにして管理するのではなく、教師集団としての力を信じ、又、教師集団の力をつけることを考える組織づくりが大切。」(40代男性)

という記述もあり、教育現場の悩みは深い。学校におけるカリキュラム編成のためには、子ども理解の取り組みが必要であるが、そのための子ども論議が少なくなり、「子ども中心」あるいは「子ども主体」といいながらも、子どもの実態が見えていないと言える状況もある。

しかし、教育実践における一致点があれば、子どもの状況を論議する教師同士の糸口を持つことができる。稲城六小の「スピーチ活動」は、教育実践の一致点として、子ども理解を進める糸口となっただけでなく、「スピーチ活動」から出発した教育実践とカリキュラム編成は、さらに、子ども同士の関係を深め、子どもと教師の関係性を築き、子どもを把握する取り組みとなった。「スピーチ活動」を通しての子ども理解は、学習を通した子ども理解であり、カリキュラム改善に向けて、教師集団の自主性や自律性を形成し、学校独自のカリキュラム編成を可能とし、学校の改革を進めている。稲城六小が、教師の異動(東京都は6年で異動)によって、職場の教師の構成が変化し、人事や予算の上で特別な措置もない公立学校において、15年間、教育実践が継続され、カリキュラムの改善が進められてきたことは注目すべきことである。

筆者は、稲城六小に在籍し、共に教育実践を進めた教師の一人として、「スピーチ活動」から出発し、子どもと教師の関係性に基づくカリキュラム編成を意識的に進めたことが、稲城六小の15年間にわたる教育実践の継承の原動力となったと考えている。このことは、さまざまな立場や考え方の人々からの稲城六小の教育実践を評価する言葉からも間違っただけでなかったことを示している。しかし、現在多くの学校で問題となっている教師集団の形成と管理職の関係や教育行政とのかわりを通して稲城六小の教育実践が継続してきた理由を解明するには、より精密な聞き取りや調査が必要であり、学校づくりにおける教師の立場や教師の専門力量の形成過程を明らかにすることは今後の課題である。

また、教師集団の構成、2008年学習指導要領など学校の状況が変化している時期にあたり、その継承をどのように進めていくのかは、一人一人の教師としての生き方や、地域と学校のあり方を問うこと、さらには、教員養成や教育現場における教師の力量形成をも課題となる。今後も、継続的に調査研究を進めたい。

- 1) 中野光, 行田稔彦, 田村真広編『あっ こんな教育もあるんだ』(新評論, 2006年), 中妻『スピーチ活動でどの子どものびる』(ふきのとう書房, 2003年), 滋賀県近江八幡市立島小学校の植田一夫の報告などによる
- 2) 佐藤学『教育改革をデザインする』(岩波書店, 1999年) 59~71頁
- 3) 大瀬敏昭, 佐藤学『学校を創る 浜之郷小学校の誕生と実践』(小学館, 2000年), 『学校を変える 浜之郷小学校の5年間』(小学館, 2003年)によって、「学びの共同体」に基づいた学校づくりの具体的な実践記録とその意義が明らかにされている。
- 4) 中妻『「協力」と「協同」の学校を目指して 「スピーチ活動」10年の実践を軸に』(『教育方法学研究』第30巻, 2005年, 95~106頁)は、学校づくりの具体的な実践となる「スピーチ活動」に注目している。
- 5) 藤田英典「共生空間としての学校 学びの共同性の基盤と可能性」(『学び合う共同体』東京大学出版会, 1996年) 38~43頁。
- 6) 稲城六小の学校づくりと教育実践については、中妻「子どもの笑顔輝く教育課程づくり~子どもの生活と地域に根ざしたスピーチ活動・総合学習・教科学習~」(『民主教育研究所年報2003(第4号)教育課程のルネサンス』民主教育研究所, 23~50頁, 2003年)によって、その具体的な内容を明らかにしている。
- 7) 第41回教育科学研究会全国大会(2002年8月9日, 一橋大学)「はじめのつどい」で、東京の教育実践を代表する学校の一つとして取り上げられている。その理由として、複数の教育研究者による学校参観と校長等へのインタビューによって、教育内発的な原動力を持って、地域・父母とつながりを作っていること 教師集団内における合意や意見交流が重視され、「一致できる活動」に取り組んでいることの意義が強調された。
- 8) 「スピーチ活動」の実践は、中妻『スピーチ活動でどの子どものびる』(ふきのとう書房, 2003年)があるが、「スピーチ活動」の先行実践としては、川崎市立中原小学校の「独話活動」があり、実践の中心を担った笠原登は、「全校で取り組む独話活動」(『話しことばで育つ学級』森久保安美編, 明治図書, 1989年)などを著し、第15回日本読書学会研究奨励賞を受賞している。
- 9) 「稲城市立学校の管理運営規則に関する規則」に基づいて、各学校から、教育委員会にあてて出される年度ごとの教育課程の届けである。教育課程は、各学校が編成することになっているので、各学校の責任で提出されることが原則となっているが、提出前には、教育委員会指導室(指導主事)との「事前相談」があり、「東京都教育委員会の教育目標」「稲城市教育委員会の教育目標」に即して編成されていることが点検され、内容を変更することを求められることもある。稲城六小の平成17年度「教育課程(届)」は、平成17年3月16日に、稲城教育委員会に提出されている。
- 10) 筆者は、稲城六小在籍時に、教務主任を5年間務めており、

- 「事前相談」を含め、教育委員会担当者より直接指導された体験がある。
- 11) 稲城市議会平成14年第1回定例会(第6号)25(2002.3.11)の答弁による。
 - 12) 中妻『「協力」と「協同」の学校を目指して 「スピーチ活動」10年の実践を軸に』(『教育方法学研究』第30巻, 2005年, 95~106頁)で、教師の「同僚性」「自律性」の再構築が、「スピーチ活動」の実践を通しなされたことを、稲城六小の教育実践に関わった教職員のアンケートや研究紀要から明らかにし、学校教育における「スピーチ活動」の有効性を提起した。
 - 13) 稲城六小『子どもの笑顔輝く「教育課程」づくり~子どもの生活と地域に根ざしたスピーチ・総合・教科学習~』(平成12・13年度稲城市教育研究奨励校研究紀要, 2001年)には、各教科、総合学習の学習指導計画と実践が掲載されている。教科課程、総合学習課程は、子どもの実態を踏まえた教員の論議が深く行われ、子どもの生活と地域に根ざした自主的な編成に基づくカリキュラムが作成され、実践されていることが報告されている。
 - 14) 植田建男「教育の目的・目標と教育課程編成」(『教育課程論』学文社, 2001年) 67頁
 - 15) 佐藤学「学力問題の危機の位相 論題と展望」(『教育方法33確かな学力と指導法の探究』日本教育方法学会編, 図書文化, 2004年) 26~33頁
 - 16) 梅原利夫「教育課程のルネサンスで学校がよみがえる」(『民主教育研究所2003 教育課程のルネサンス』民主教育研究所, 2003年) 5~19頁。
 - 17) 梅原利夫『学力と人間らしさをはぐくむ』(新日本出版, 2008年)を著し、「2010年代の教育」のあり方について、学習指導要領に替わるものを提案している。
 - 18) 柴田義松『教育課程』(有斐閣, 2000年) 115~119頁
 - 19) 中妻『「協力」と「協同」の学校を目指して 「スピーチ活動」10年の実践を軸に』(『教育方法学研究』第30巻, 2005年, 95~106頁)
 - 20) 稲城六小に在職、在籍した教職員へのアンケート調査を、2004年7月に実施した。
 - 21) 総合学習の実践報告は、前掲『稲城六小研究紀要』(2001年)の他、中妻「多摩川で学ぶ」(『歴史地理教育』549, 1996年, 24~31頁), 「多摩川で学ぶ子どもたち」(『ともに生きる総合学習』フォーラムA, 1999年, 22~30頁)がある。
 - 22) 稲城市議会平成16年第4回定例会(第25号)625(2004.12.8)の教育部参事の答弁は、稲城六小の総合学習「多摩川」の実践例をあげて、市内の学校における地域と自然を活用した学習の意義を述べ、稲城市の教育内容の重点の一つとしている。
 - 23) 『稲城六小研究紀要』(2001年)には、各教科の学習指導計画と1単元ずつの実践報告が掲載されている。また、中妻「子どもの笑顔輝く教育課程づくり~子どもの生活と地域に根ざしたスピーチ活動・総合学習・教科学習~」(2003年)の1年生の算数の実践や、「奈良のみやこ 天皇中心の国づくり」(『わかったたのしい社会科6年の授業』大月書店, 2001年, 48~59頁)など、子どもの生活と地域を生かした教科学習の実践報告がある。
 - 24) 稲城六小『子どもの笑顔輝く「教育課程」づくり~子どもの生活と地域に根ざしたスピーチ・総合・教科学習~研究発表会のまとめ』(2002年)に掲載された柴田義松(東京大学名誉教授), 中野光(前中央大学教授)の講演記録による。
(2008年9月3日受理)